

原発事故の影響 ママ目線で

東日本大震災 7年

東京とフクシマ ㊦

乳幼児を連れた母親らが

8日、世田谷・下北沢駅近くの集会所に集まった。国の食品検査データを「ママ目線」で分析する2人の講師が、データの読み方や食品汚染の現状を解説。母親たちは、給食の牛乳は大丈夫かなどと質問した。

7年前の震災に伴う原発事故後、都内でも平常時の上限を超える放射線量が測定された。母親たちは安全な水や遊び場を求めて奔走した。集会所の主催団体の一つ「世田谷こどもを守る会」の中山瑞穂さん(47)も、そんなママの1人だ。事故当時、都内の有名ホ

子どもを守る情報発信「30年は続ける」



中山瑞穂さん

測定システムを解説する石丸偉丈さん。床にある円筒形の測定器で測った放射線量がパソコン画面に表示される。国分寺市のこどもみらい測定所

テルに勤めていた。宿泊客から「小さな子がいるのになぜ逃げないの」と言われて心配になった。小学3年の一人息子(9)は、当時はまだ保育園児で、園の給食なども気になった。

インターネットは不安な情報であふれていた。新聞やテレビで伝わる政府や東京電力の会見との落差が

ら、頭の中が混乱した。「どの情報を信じて良いのかわからなかった」。右往左往する母親を揶揄する「放射脳ママ」という表現が頭にちらつく。そんな折に知ったのが「守る会」だった。社会運動とは無縁だったが、同じような母親らと動き出す。

全国の母親や父親とも手

ながる仲間は約370グループまで増えた。霞が関にでかけて閣僚に「子どもを守って」と陳情した。

ただ、熱気は長続きしない。子育てで忙しい。子どもが成長して親としてやれることがない。

中山さんが広報を担当する「全国ネット」の活動の中心は今、情報発信に移った。検索した関連ニュースや厚生労働省の検査データを分析してメールマガジンで紹介する。放射能を解説する小冊子も発行した。

最近、「3・11って何？」と若い母親から聞かれて驚いた。月日の流れを実感しながらも誓う。

「汚染源の一つである」セシウム137の半減期の30年は続ける「国分寺駅近くの雑貨店の

片隅に「こどもみらい測定所」はある。震災後に各地で生まれた市民放射線測定所の一つだ。

代表の石丸偉丈さん(45)が東日本の地図を示した。測定所が連携して3400カ所の土壌の放射線量を測定した結果を、昨年9月時点の値に換算して色別で表示する。23区の東部は高い値の黄色だ。

市民からの測定依頼は大幅に減った。休止する測定所もでた。それでもやるべきことがあるという。

「冷静な目で分析して教訓を得るのが、未来の世代への責任だから」今夏、市民測定所や国のデータなどに基づく事故の記録と分析を約100ページの

本にまとめるつもりだ。(山浦正敬)

原発事故の都内への影響

都水道局の金町浄水場の水道水から、国の基準の倍以上の放射性物質が検出され、都は震災から約半月後、23区全域と多摩地域の一部を対象に、乳児に水道水を与えるのを控えるように呼びかけた。保育園などでは、水筒の持参や給水車の

巡回などの対応に追われた。スーパーなどのペットボトルの水はまとめ買いなどで一時、品不足に。近畿大教授の調査では一部の土壌からは高濃度の放射性物質が検出された。渋谷区や板橋区など独自の測定を始める所も相次いだ。母親らの連携も進み、民間の放射線量測定所も現れた。